

コットンと走れないウサギ



コットンは時々旅をします。

ある森に入ると、足を怪我して走れないウサギと出会いました。

ウサギはコットンに挨拶をしました。

「こんにちは。あなたはどこから来たのですか？」

コットンは答えました。

「わたしは遠い所から来たのです。」

ウサギはしょんぼりとして、呟きました。

「いいなあ。あなたは自由に動けて。」

コットンはウサギに訊ねました。

「どうして？ 君は全く走れないのですか？」



ウサギは涙をはらはらと流しながら、こう言いました。
「ぼくは鉄砲で撃たれて足に怪我を負ってしまったのです。
それで全く走れなくなりました。」
コットンは言いました。
「それはお気の毒に。」



「ああ、ぼくは独りぼっちだ！」

「どうしてですか？」

ウサギは頭を抱えて言いました。

「ぼくはもう速く走れないからウサギじゃないんです。

仲間のところに戻れません。一緒に走れないからです。」



ウサギは地面に伏して大泣きしました。
コットンはそんなウサギを見て言いました。
「ウサギはどうして速く走るのですか？」
ウサギは顔を上げてきょとんとしました。
「だって速く走るからですよ。」
コットンは首をかしげました。
「誰がウサギは速く走ると決めたのですか？
速く走るのがウサギ、と誰が決めたのですか？」
ウサギはウーンと唸って考えました。
「だれなんだろう？」



ウサギははたと気付いて、コットンに訊ねました。
「そういえばあなたの名前を聞いていませんでした。」
コットンは答えました。
「わたしはコットンです。」
「シロクマですか？」
「あなたがそう思うならシロクマなのでしょう。」
「どういう意味ですか？」
コットンは答えました。
「目に見えるものは当てにならないという意味ですよ。
あなたからはシロクマだと見えても、
他のウサギからしたら犬かもしれません。
それぐらい目に見える全てのものが真実とは
限らないのです。」



ウサギは不思議に思いました。
「本当は誰ですか？」
コットンは言いました。
「わたしはコットンです。」
ウサギは首をかしげました。
野原を駆け回る仲間達が見えました。
コットンは続けて言いました。
「ウサギが速く走るとは限らないという意味ですよ。」
ウサギはアッと叫びました。



「そういえば、カメが速く走っているところを見た事があります。」

「では、速く走るカメはカメではないのですか？」

ウサギは頭を振りしました。

「いいえ、カメはカメです。」

「ならば、あなたはウサギなのでしょう。」

ウサギは耳をピン、と立てて言いました。

「そうでしたね。ぼくはウサギです。」



ウサギに笑顔が戻りました。

「おや、お友達があなたを心配しているようですよ。」

茂みの向こうに、ウサギたちが集まってきて何事かと様子を見ていました。

ウサギはお辞儀をしました。

「ありがとうございます。ぼくはウサギとしての誇りを取り戻せました。」

「いいえ、はじめからあなたは誇りを失っていませんでしたよ。」

ウサギはゆっくりと歩いて仲間のところへ行きました。

